



＜同志社人が母校を誇りに思える情報＞

「同志社ファン・レポート」 Ver. 2-041 号（通巻 272 号）

「新島襄の青春」 -2-

同志社大学名誉教授 伊藤彌彦氏



密航船中の新島襄

・はじめに

今日、函館山から眺める函館港の夜景は美しい。旅人の旅情を十分和ませてくれる。しかし長い鎖国政策の末、やむなく開港し五年目の函館港の夜は無粋な暗闇におおわれていた。

その寂しい港から元治元年 6 月 14 日（1864 年 7 月 17 日）深夜、新島青年は人生を賭けてベルリン号に乗船し、密出国した。そして元治元年 7 月 9 日（1864 年 8 月 10 日）途中の上海で米国に向かうワイルド・ローヴァー号乗換え、その船は 1865 年 7 月 20 日、目的地のボストン港に入港した。新島が正式に船を離れ、アメリカに入国できたのは 1865 年 10 月 11 日のことであった。

この期間、密航船上で過ごした約 1 年 3 カ月の船中生活は、新島青年の内部に大きな変化を生んだ。航海中は異邦人とのみ生活を共にし、アジア諸国を歴訪したのであるから引き籠りの時間ではなかったが、閉鎖的な空間で暮らしたことには間違いない。それを考えれば、あまり適切な比喻ではないかも知れないが、青虫が蝶に羽化するために<さなぎ>という殻にこもる期間を経るように、青年新島にとっても乗船期間は内面的飛躍を遂げる変容期（メタモルフォーゼ）の役割を果たしたと私は考えている。ベルリン号での 25 日そしてワイルド・ローヴァー号での一年あまり、この船上の時間は青年新島という人間を、旧世界から脱皮させ、アメリカ文明を知る近代市民に変容させるための巣籠もり期間であった、と言えるのではないか。個人史においては封建士族から文明市民の前段階への変容である。

・乗船直後のパニック

ベルリン号乗船7日目には、刃傷沙汰に及びそうな人格破綻の危機に面した。難民状態で乗船した誇り高き武士が、異文化接触の環境に適応できなかったのである。

その日の出来事を、後年こう書く、「ある乗客がいた。彼がアメリカ人なのかイギリス人なのか、私には分からない。…彼はとても親切に接してくれることもあったが、時には私を非常に乱暴に扱った。ある時、何を命令されたのか分からなかったために、私は彼から殴られた。私は激怒し、仇を取るために日本刀を取りに自分の部屋に急いで駆けおりました。刀をつかみ、まさに部屋から飛び出そうとしたその時、胸に湧きあがってくるものがあった。…この程度のことに耐えられなければ、どうして重大な試練に立ち向かうことができようか…」と
(「私の若き日々」『新島襄自伝』 岩波文庫、66頁)。

同じ日について航海日記にはこうある。

六月二十一日 ソアデー [実際はサタデー] 晴 (中略)

吾れ今、言語通ぜざる故、空しく支那人の指揮を受けり。然し他年、彼等をして豚犬の如くならしめん。

慨然たるに堪えず、偶然一詩を得たり。

自從辞函楯 空被役洋人 函楯を辞してより、空しく洋人に役せらる。

憂国還憂国 憤然不思身 憂国また憂国、憤然として身を思わず。

(「航海日記」同上書所収、104頁)

もしこの時、新島が切れていたら、セイヴォリー船長はとんでもない奴を乗船させた、と下船を命じ、今の同志社も存在しなかったであろう。

この日中国人の指揮下で肉体労働をする時、新島青年の心は中国人を侮蔑視する偏狭な民族意識でいっぱいであった。洋人に殴られた時は、武士の面目丸つぶれで思わず刀に手をかけようとする士族根性丸出しの青年であった。それらの根底には言葉が通じないというコミュニケーション障害が横たわっていた。なんとか憤怒を、漢詩を作ることで精神のバランスを保っていたのである。

翌日の航海日記も陰鬱である。

六月二十二日 半晴

吾れ思う、今日、船、右舷紀州地方に当らん。午時左舷東方に一の島を遥かに見たり。この島如何なる名なるを知らず。

甲比(カピ)丹(タン)一切書を教えず。外に一人有りし故、この者に教授を頼みしが、甲比丹同様、貪慾鄙劣の者なる故、七つか八つの語を聞き、且つ一語三、四度も教え呉れしに、真似出来ざれば怒声を発し、或は鼻と頤(あご)に手を掛け、口を開きて、「do と云え」と申せし事もこれ有り候。

英語を習おうとしても船長は教えてくれない。もう一人の洋人に聞こうとしたが、自分の顔を無礼もつかまれ、“do”と言われた。こういうわけで新島はフラストレーションの真只中であつた。乗船1週間にして、全く言葉の通じないカルチャーショックの波状攻撃にさらされ、新島は最悪の状態に陥り、刀に手をかけそうな人格破綻寸前のところで怒りを一気に漢詩に託して凌いでいた。

ストレスの原因を挙げてみると、1.言語不通、2.襦袢の洗濯、3.中国人や洋人に命令される、4.学問の不振、発音学習の困難、5.他人に顔を触られる、ということになる。そしてついに「刀に手をかけ」そうになった時、自分には「憂国」という高貴な使命があることを思って、屈辱を我慢し、思いを漢詩に託した。こういう密航船での船中生活の始まりであつた。

・洗濯する青年

また六月二十一日の航海日記には、こんな記述もある。

今は襦袢(じゅばん)三枚を洗う。我れ家に在りし時、自衣を洗わず。然し今は学問の為とは申しながら、自ら辛苦を知るは、これ又学問の一と諦(あき)らめり。去り乍(なが)ら、父母をしてこの辛苦を知らしめば、必らず四行の涙、潜々ならん。

これは21歳の新島襄が、人生で初めて自分の下着3枚を洗濯した時の感想である。洗濯のようなケチな仕事は下女下男することで、誇り高い武士はそんなことできるかと思っていたのであろう。しかし今、学問のためには仕方ないと諦めて、この苦勞をしている。この光景を父母が見たら、四行の涙を流して同情してくれるだろう、と甘ったれたことを書く。この心理は「士は心を勞す、小人は身体を勞す」とする武士の世界の価値観に染まりきった青年であることを示している。

その後の日記には、2回ほど洗濯の記録が書かれているが、そこには姿勢の変化がみられる。

元治二年正月元日なり [1865年1月29日、元号が慶應になったのを知らない]

たらちね [親たち] は 如何(いかに)有けん けさの春

古郷(ふるさと)のけさは如何なる色ならん つらき勤(つとめ)の春も知らまじ

元日に衣そそくは如何なるぞ 去年(こぞ)の旧(ふる)あか洗抜とて

「元旦に自分は洗濯をしている、去年の古垢を洗い流そうするように」と、元旦に洗濯している自分の姿を、父母はまさか想像していないだろうと、諧謔味(かいぎやくみ)をもって詠う。少し心のゆとりが出ていることが分かる。

さらにその5カ月後には、こう書いている。

五月十七日(水) [1865年5月17日]

今暁四時より六時迄雨降る。雨水を取り我が衣を洗えり。且つ船主の下衣、禪、枕覆等を洗えり。午後二時に又雨降り。

船上では7日毎に洗濯していたが、これを見ると、自分の衣服だけでなく、船長の下着、パンツ、枕カバーまで洗濯したことが淡々と記録されている。「洗濯」をめぐる意識の変化は明らかである。考えてみれば誰かが洗濯しなければならないのだから、自分の衣類は自分で洗うのが当然のことであり、江戸にいた時、母親にさせて当然、と思っていたことの方がおかしいのである。また船長の下着まで洗ったというこの文章に、屈辱感とか船長への仕返しへの感情は見られない。これは新島とテイラー船長との人間関係が良好であることの証拠でもある。

後にアメリカでは後見人に恵まれて高校に行かせてもらったが、その時の父親宛の手紙に、「さて小子義も長の旅を致し、自身に衣類を作り、洗たく、つぎ当て等をいたし候ゆえ、たとい宿の婦人世話いたしくれ申さずとも、決して差しつかいはござなく候」

(『新島襄の手紙』岩波文庫 48頁)

と書くことが出来た。あきらかに人格が熟してきた。また肉体労働を蔑視してはいけないと気付き始めている。もし今日のように飛行機で一飛びしてアメリカに行ったならこうはならなかったであろう。

あるいはまた「我持前之役目は勿論、自分の衣服を洗ひ且補綴し、空しく光陰を送れり、然し余〔暇〕あれば文を学べり。我重衣(ふたえ)の裏を取り筒ぼふ襦半を為(つく)れり。吾茲(ここ)に於て深く父母眷顧の鴻恩に感し『苦を嘗(なめ)て知れ親の恩』と云へり」

(「箱楯よりの略記」『新島襄全集 5』76頁)

と記す。

かつて洗濯する自分へ親の同情を期待していた青年は、親の恩義を理解する青年に成長したのである。一年余りの船上生活は、自分の生活を律するのは自分という自立心を育てていた。

ベルリン号では、乗船5日目の6月19日の記録に、

「船頭より言付けられし我の役目は、船頭部屋の掃除、彼の給仕及茶碗等を洗ひ、彼の犬をやしなふ等なし。日々船頭吾に僅かの英語を教へ呉れり」

(「函館よりの略記」『新島襄全集 5』72頁)

とあり、29日には「今日半日、油掃除」(『新島襄自伝』107頁)とある。

ワイルド・ローヴァー号では、「吾に船頭部屋の掃除及び給仕等の役目を言付けり」

(『新島襄全集5』74頁)

とある。

そうした労働体験を通じて、「肉体労働することの大切さ」にだんだんと気がついてきている。肉体労働をすることへの敬意というか、労働の価値を認識し始めている。もっと言えば、そして、テイラー船長のもとで暮らしているうちにだんだんと人間ができてきたというか、アメリカ市民の人間観に接し、武士の価値観から解放されてきている。

・旧世界からの離脱、精神に伸びやかさ

当時の侍は自分の心情を漢詩に托して詠う習慣があったが、乗船九カ月目の1865年4月25日にはこう詠む。

有感

離家初解天之広	家を離れて初めて解す天の広きを
航海反知地廻些	海を航して反(かえ)って知る地の些(すくな)きを
脱櫂此身駆千里	櫂を脱してこの身千里に駆る
枕頭猶是夢郷家	枕頭なお是れ郷家を夢む

(『新島襄全集 5』62頁)

藩や家といった煩わしい徳川体制から自由になった喜びが感じられる。

1865年5月30日(火)。船はいよいよ喜望峰のところに來ていた。そしてまた漢詩を詠んでいるが、これがなかなかいい詩である。

船中偶成

何百白駒去匆々	何百の白駒去って匆々
往事如烟縵是空	往事烟(けむり)の如く縵て是れ空し
贏得我身筋骨骸	贏(か)ち得たり我が身筋骨骸(こう)なるを
一年強半在船中	一年強半船中に在ればなり

(同上書、64頁)

武士たちが白馬で駆けめぐった幕末の動乱は遠い彼方に去ってしまった。旧事は煙のようにならなくなって夢になった。今の自分は筋肉逞しい身体になっている。一年半ほどの船上生活のおかげで、と、肉体労働をして逞しくなった自分を誇らしく詠っている漢詩である。

青年新島が自分の人生について語る時に、明るさとのびやかさが出ているのである。抑圧された幕末時代の人生から解放された自分があった。このような新島襄の成長にはテイラー船長の無言の感化があったことについては次回に紹介することにする。